

研究論文

保健体育科教諭，養護教諭志望学生に対するがん教育の試み

野口 直美

北翔大学教育文化学部教育学科

抄 録

本研究の目的は、保健体育科教諭や養護教諭を志望する学生を対象にがん教育の授業を試み、教職を志望する学生に対するがん教育の実践力育成について検討することである。その結果、次の点から本研究の対象者に対するがん教育は有用と考えた。(1) 対象者のがん教育の学習経験は一様ではなく、十分とはいえない。(2) がんを多様な視点で捉えがんやがん教育の理解を深めることになった。(3) がん教育を受けた高校生の多様な感想から触発され、がん教育の実践者としての意識の喚起につながったことが推察された。しかし、本研究の授業実践では外部講師との協働についての内容が十分ではなかった。保健体育科教諭や養護教諭を志望する学生に対するがん教育の実践力の育成として、がんの理解、がん教育の理解に加え、外部講師と協働したがん教育の重要性と進め方の3観点から授業を構成することが望ましいと考えられた。

キーワード：がん，がん教育，大学生，教職志望，授業実践

I. 研究の背景と目的

我が国においてがんは、1981年より死因順位第1位であり、日本人が一生涯のうちにがんと診断される確率は、男性65.5%、女性51.2%（2019年データに基づく）、がんで死亡する確率は、男性26.2%、女性17.7%（2021年データに基づく）である。また、2009～2011年にがんと診断された人の5年相対生存率は64.1%である¹⁾。つまり、2人に1人ががんになり3.8人に1人ががんで亡くなるとともに、診断5年後に6割以上の方が生存する疾患がんである。文部科学省は2015年3月「学校におけるがん教育の在り方について」の報告書を取りまとめた。この報告書により、がん教育は「健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育²⁾と定義された。

また、がん教育の目標は「がんについて正しく理解できるようにする」、「健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする³⁾ことが掲げられ、その具体的な内容として「がんとは（がんの要因等）」、「が

んの種類とその経過」、「我が国のがんの状況」、「がんの予防」、「がんの早期発見・がん検診」、「がんの治療法」、「がん治療における緩和ケア」、「がん患者の生活の質」、「がん患者への理解と共生」の9項目や指導上の留意事項が示された。

一方、2017年に告知された小学校学習指導要領解説体育編では、小学校6年生「病気の予防」の内容として「喫煙を長い間続けるとがんや心臓病などの病気にかかりやすくなるなど影響があることについて触れるようにする³⁾とされ、「肺がん」から「がん」に変更された。また、中学校学習指導要領解説保健体育編では、単元「健康な生活と疾病の予防」の「生活習慣病の予防」において、「がんの予防」として「がんは、異常な細胞であるがん細胞が増殖する疾病であり、その要因には不適切な生活習慣をはじめ、様々なものがあることを理解できるようにする（中略）健康診断やがん検診などで早期に異常を発見できることなどを取り上げ、疾病の回復についても触れるように配慮するものとする⁴⁾が追記された。さらに、2018年に告知された高等学校学習指導要領解説保健体育編では、単元「現代社会と健康」に新設された「生活習慣病などの予防と回復」において、「がんについては、肺がん、大腸がん、胃がんなど様々な種類があり、生活習慣のみならず細菌やウイルスの感染など

の原因もあること（中略）がんの回復においては、手術療法、化学療法（抗がん剤など）、放射線療法などの治療があること、患者や周囲の人々の生活の質を保つことや緩和ケアが重要であることについて適宜触れるようにする⁹⁾が追記された。加えて、がんに関する教育は、「保健体育科におけるがんの予防や回復に関する内容が中心となるが、特別活動や道徳科等も含め、学校教育全体を通じて行われる健康教育に位置付けて推進する必要がある¹⁰⁾」こととされている。

このようながん教育推進の動向において、前学習指導要領ではがんに特化した明記がないため、現在の大学生が学習してきたがん教育は一様ではないことが推察された。しかしながら、保健体育科教諭や養護教諭を志望する学生が教職に就いた際、その学校におけるがん教育の推進者としての役割が求められる。したがって、保健体育科教諭や養護教諭を志望する学生は、在学中においてがんの正しい理解にとどまらずがん教育の実践的指導力を培うことが必要と考えられた。

そこで、本研究では保健体育科教諭や養護教諭を志望する学生を対象にがん教育の授業を試み、教職を志望する学生に対するがん教育の実践的指導力の育成について検討することを目的とした。

Ⅱ. 方 法

1. 対象及び教育実践の概要

対象は、北海道A大学において「教育方法論」（3年後学期）を履修する主に保健体育科教諭志望学生78名、養護教諭志望学生31名の受講学生とした。

本研究は、事前調査、授業実践、授業のふり返り、事後調査からなる。まず、受講学生に対し事前調査としてFormsによる無記名式Web調査を授業実施2週間前に行った。その内容は、身近な人のがんの経験、がんについての話題、がんの学習経験とその校種及びその学習形態、がんの印象、がん教育に関する関心等であった。

授業実践は、「がん教育を考える」2講連続の集中講義とし、保健体育科教諭志望学生に対しては2022年12月、養護教諭志望学生に対しては2023年1月に行った。授業の1講目は、「がんを理解する」をテーマに、がんと向き合うがん患者の日々の動画を視聴させたのち、受講学生のがんとのかかわり、がんの疫学、がんはある程度予防できることやがん検診の重要性などについて概説した。次に、北海道B高等学校における緩和医療をテーマにした講演に対する生徒の心に残ったメッセージの動画を視聴させた。そして、「がん教育で大切にしたいこと」についてグループごとにディスカッションを行っ

た。2講目は「がん教育を理解する」をテーマに、がん教育の社会的背景、学習指導要領におけるがん教育の位置づけ、小・中・高等学校の保健の教科書にみるがんの学習の取り扱い、がん教育における配慮について概説した。加えて、野口（2023）¹¹⁾が北海道C高等学校のがん教育の実践で使用した動画、がん教育を受けた生徒の感想のメッセージ動画を視聴させた。その後、がん教育において教科指導を行うことになる保健体育科教諭志望学生に対しては、がん教育の題材を決め授業を組立てるグループワークを行わせた。一方、健康教育の一環として外部講師を活用するなどコーディネーター役となる養護教諭志望学生に対しては、「がん教育で伝えたいこと」についてダイヤモンドランキングのグループワークを行わせた。

授業後、ふり返り及び事後調査としてFormsによる無記名式Web調査を行った。その内容は、講義に対する学びの実感、がん教育を行うことを想定した際の参考度合、がんの印象についてであった。

2. 検証の内容

事前事後の調査においては、 χ^2 検定及びt検定を行った。その際、統計上の有意水準は5%未満とした。また、授業のふり返りの記述については「KHCoder 3」（樋口、2014）¹²⁾を用いて計量テキスト分析を行った。

3. 倫理的手続き

対象者に、本研究の目的と倫理的配慮について書面と口頭で説明を行った。事前事後の調査およびふり返りの提出は任意であり、提出をもって同意が得られたと判断することとした。また、教育実践を通して得られた情報は匿名にし、本研究のみに使用することを伝え、全てのデータは研究者自身が管理し第三者には開示しないこととした。

Ⅲ. 結 果

1. 身近な人のがんの経験

事前調査では、保健体育科教諭志望者62名（66.7%）、養護教諭志望者31名（33.3%）計93名、事後調査では、保健体育科教諭志望者44名（59.5%）、養護教諭志望者30名（40.5%）計74名から回答を得た。

身近でがんを経験した人がいる者43.0%（40名）、がんで療養中の人がある者10.8%（10名）、がんで亡くなった人がいる者45.2%（42名）、このいずれかの人がある者58.1%（54名）であった。これらの項目におい

表 1. 身近な人のがんの経験 n=93

	全体 n=93		保健体育科教諭 志望 n=62		養護教諭志望 n=31		χ ²	p 値
	%	人数	%	人数	%	人数		
身近でがんを経験した人がいる	43.0	40	33.9	21	61.3	19	9.11	0.011*
身近でがんで療養中の人がある	10.8	10	6.5	4	19.4	6	3.62	0.164
身近でがんで亡くなった人がいる	45.2	42	40.3	25	54.8	17	1.76	0.414
上記いずれかの人がある	58.1	54	54.8	34	64.5	20	0.79	0.37

*p<.05

て、身近でがんを経験した人がいる者は、養護教諭志望者61.3% (19名)、保健体育教諭志望者33.9% (21名) であり (χ²=9.11, p=.011)、養護教諭志望者が保健体育教諭志望者より身近でがんを経験した人のいる割合が有意に高かった (表 1)。また、がんについて家族で話題になったことがある者60.2% (56名)、がんについて考えたことがある者83.9% (78名) であった。

2. これまでのがんに関する学習経験

これまでの学校教育におけるがんに関する学習経験は、ある者52.7% (49名)、ない者47.3% (44名) であった。その学習経験は、中学・高等学校49.0% (24名) が最も多く、次いで高等学校28.6% (14名) であり、その学習経験が複数校種である者61.2% (30名) であった (図 1)。学習形態は、教師による保健の授業73.5% (36名)、外部講師による講話講演14.3% (7名)、教師及び外部講師による講話講演12.2% (6名) であった。

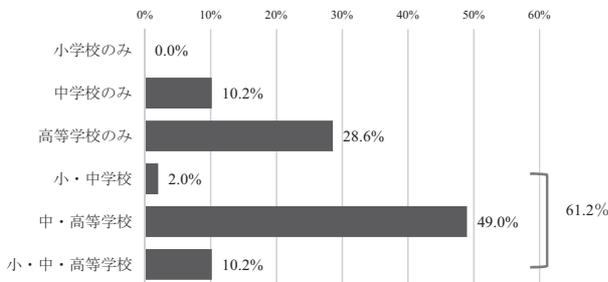


図 1. がんの学習経験があった校種 n=49

3. がん教育に関する関心

がん教育に関する 7 項目の関心について「とても関心がある」から「全く関心がない」の 4 件法で回答を求めた。その結果、全ての項目において関心がある者が 9 割を超えていた。そのなかで、「とても関心がある」項目は、「がん教育を行う上で大切なこと」61.3% (57名) が最も多く、次いで「がん教育を行う上での配慮」54.8% (51名)、「がん教育の実際」、「がん教育を受けた生徒の感想」、「外部講師との連携」いずれも 50.5% (47名) であった (図 2)。

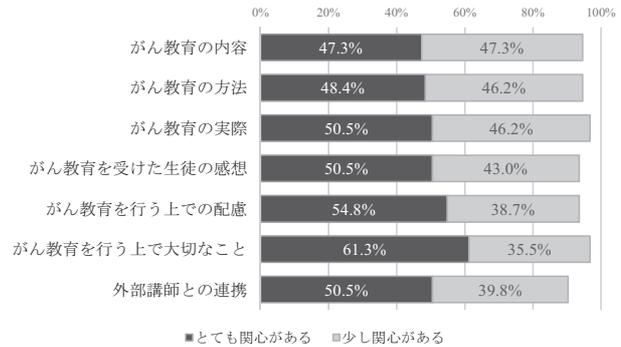


図 2. がん教育に関する関心 n=93

4. 授業後の学びの実感とがん教育を行う際の参考度合

がん教育に関する 7 項目の学びの実感について「とても学びの実感がある」から「全く学びの実感がない」の 4 件法で回答を求めた。その結果、全ての項目において学びの実感がある者が 9 割を超えていた。そのなかで、「とても学びの実感がある」項目は、「がん教育を受けた生徒の感想」85.1% (63名) が最も多く、次いで「がん教育を行う上で大切なこと」83.8% (62名)、「がん教育の内容」、「がん教育の実際」、「がん教育を行う上での配慮」いずれも 82.4% (61名) であった。

また、教職に就いてがん教育を行う際の参考度合についても、全ての項目において参考になった者が 9 割を超えていた。そのなかで、「とても参考になった」項目では、「がん教育を行う上での配慮」93.2% (69名) が最も多く、次いで「がん教育を行う上で大切なこと」90.5% (67名)、「がん教育の内容」、「がん教育を受けた生徒の感想」89.2% (66名)、「がん教育の実際」87.8% (65名) であった (表 2)。

5. がんは怖いと思うかとその理由

がんは怖いと思う者は、授業前88.2% (82名)、授業後74.3% (55名) であり (χ²=5.36, p=.021)、授業後がんは怖いと思う者が有意に減少していた (表 3)。

表2. 授業後の学びの実感とがん教育を行う際の参考度合 n=74

	とても学びの実感がある (①)		少し学びの実感がある (②)		とても参考になった (③)		少し参考になった (④)		学びの実感がある (①と②)		参考になった (③と④)	
	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数
がん教育の内容	82.4	61	14.9	11	89.2	66	9.5	7	97.3	72	98.6	73
がん教育の方法	75.7	56	23.0	17	86.5	64	9.5	7	98.6	73	98.6	71
がん教育の実際	82.4	61	14.9	11	87.8	65	9.5	7	97.3	72	98.6	72
がん教育を行う上での配慮	82.4	61	14.9	11	93.2	69	5.4	4	97.3	72	97.3	73
がん教育を受けた生徒の感想	85.1	63	13.5	10	89.2	66	8.1	6	98.6	73	97.3	72
がん教育を行う上で大切なこと	83.8	62	14.9	11	90.5	67	8.1	6	98.6	73	95.9	73
外部講師との連携	60.8	45	32.4	24	66.2	49	28.4	21	93.2	69	94.6	70

表3. 授業前後におけるがんはこわい思い 事前n=93 事後n=74

	思う		思わない/どちらともいえない		χ ²	p値
	人数	%	人数	%		
授業前	93	88.2%	82	11.8%	5.36	0.021*
授業後	74	74.3%	55	25.7%		

* $p < .05$

がんはこわいと思う者(授業前82名, 授業後55名)のこわいと思う理由は、「がんで死に至る場合があるから」授業前93.9% (77名), 授業後90.9% (50名)で最も多かった。

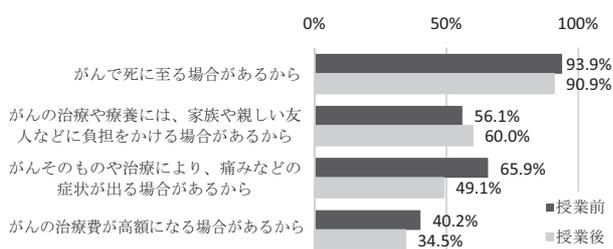


図3. がんがこわいと思う者のその理由 (複数回答) 事前n=82 事後n=55

また、「がんそのものや治療により、痛みなどの症状が出る場合があるから」授業前65.9% (54名), 授業後49.1% (27名)と最も減少していた。一方、「がんの治療や療養には、家族や親しい友人などに負担をかける場合があるから」授業前56.1% (46名), 授業後60.0% (33名)と増加していた。しかしながら、すべての項目において授業前後における有意差は認められなかった(図3)。

6. 授業前後におけるがんに対する印象

授業前後におけるがんに対する印象10項目について、「とても思う」から「全く思わない」の4件法で回答を求めた。その結果、授業前では「とても思う」項目として、「人生を変えてしまう」61.3% (57名)が最も多く、次いで「身近な病気」60.2% (56名), 「がんになっ

てはじめて気づくことがある」57.0% (53名)が上位3項目であった。一方、授業後では、「身近な病気」87.8% (65名)が最も多く、次いで「がんになって初めて気づくことがある」71.6% (53名), 「人生を振り返る」66.2% (49名)が上位3項目であった(図4)。

次に、がんに対する印象10項目について「とても思う」4点, 「少し思う」3点, 「あまり思わない」2点, 「全く思わない」1点と配点し、授業前後についてt検定を行った。その結果、「身近な病気」($t(164) = 3.74, p < .001$), 「予防できる病気」($t(165) = 6.72, p < .001$), 「人生を振り返る機会」($t(164) = 5.06, p < .001$), 「自分を見つめる機会」($t(163) = 4.42, p < .001$), 「がん=死ではない」($t(163) = 3.86, p < .001$), 「がんになって初めて気づくことがある」($t(164) = 2.44, p = .001$)では、授業後において有意に増加した。また、「人生を変えてしまう」($t(148) = 2.91, p < .001$), 「多くのものを失う」($t(150) = 2.58, p = .001$)では、授業後において有意に減少した。「自分に関係ない病気」, 「充実した生き方ができなくなる」では、有意差が認められなかった(表4)。

授業前のがんの印象と身近でがんを経験した人や亡くなった人がいることとの関連については、いずれの項目も有意差が認められなかった。授業前のがんの印象とがんの学習経験との関連では、「人生を振り返る」($\chi^2 = 4.01, p = .045$)が学習経験のない者に有意に多く、それ以外の項目では有意差が認められなかった。

7. 授業のふり返しにおける頻出語

保健体育科教諭志望者58名, 養護教諭志望者31名による授業のふり返りの記述について、「KHCoder 3」(樋口, 2014)⁸⁾を用いて頻出語の抽出を行った。その結果、総抽出語数27,962語, 文章数830文, そのうち出現回数20回以上の語は69語であった。具体的には、「がん」(571回)が群を抜いた出現回数であり、次いで「がん教育」(204回)であった。以下、「思う」(193回), 「考える」(173回), 「大切」(161回), 「自分」(145回), 「人」(141

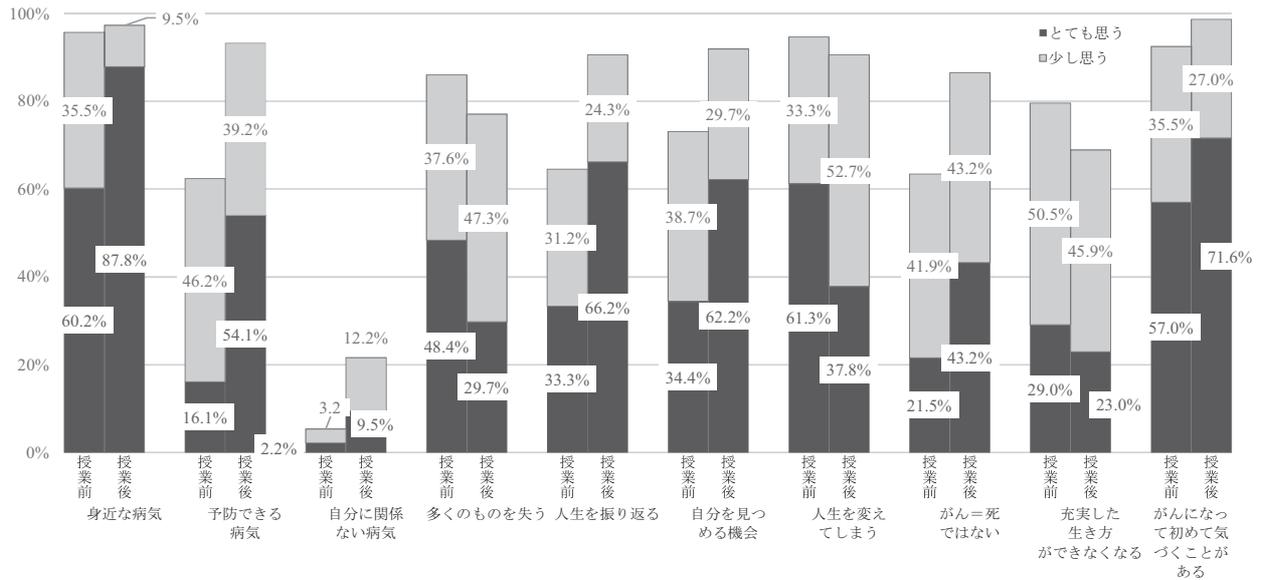


図4. 授業前後におけるがんに対する印象 事前n=93 事後n=74

表4. 授業前後のがんの印象 配点による比較 事前n=93 事後n=74

	授業前 n=93		授業後 n=74		t 値	p 値
	M	SD	M	SD		
身近な病気	3.56	0.58	3.85	0.43	3.74	p<.001 ***
予防できる病気	2.75	0.76	3.47	0.62	6.72	p<.001 ***
自分に関係ない病気	1.48	0.67	1.70	1.02	1.60	0.11
多くのものを失う	3.34	0.71	3.04	0.78	2.58	0.01 *
人生を振り返る機会	2.90	0.96	3.55	0.71	5.06	p<.001 ***
自分を見つめる機会	3.01	0.90	3.54	0.65	4.42	p<.001 ***
人生を変えてしまう	3.56	0.60	3.27	0.67	2.91	p<.001 ***
がん=死ではない	2.78	0.86	3.27	0.76	3.86	p<.001 ***
充実した生き方ができなくなる	3.08	0.73	2.88	0.81	1.63	0.10
がんになって初めて気づくことがある	3.48	0.67	3.70	0.49	2.44	0.02 *

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表5. 授業のふり返しにおける出現回数20回以上の頻出語69語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
がん	571	命	72	経験	37	早期発見	25
がん教育	204	行う	69	聞く	35	見る	24
思う	193	授業	68	自身	33	深い	24
考える	173	伝える	68	気持ち	32	怖い	24
大切	161	病気	66	心	32	印象	22
自分	145	知識	59	家族	31	喫煙	22
人	141	養護教諭	58	重要	31	今日	22
生徒	127	亡くなる	49	辛い	31	実際	22
学ぶ	122	検診	48	改めて	30	少し	22
感じる	119	今	48	生活習慣	30	生活	22
身近	103	理解	47	機会	29	お話	21
講義	95	子ども	45	可能	28	患者	21
知る	92	必要	45	本日	28	時間	21
児童生徒	82	予防	42	高い	27	内容	21
生きる	82	配慮	39	祖父	26	死	20
受ける	79	教育	38	ありがとう	25	声	20
言葉	76	多い	38	教員	25	動画	20
今回	72						

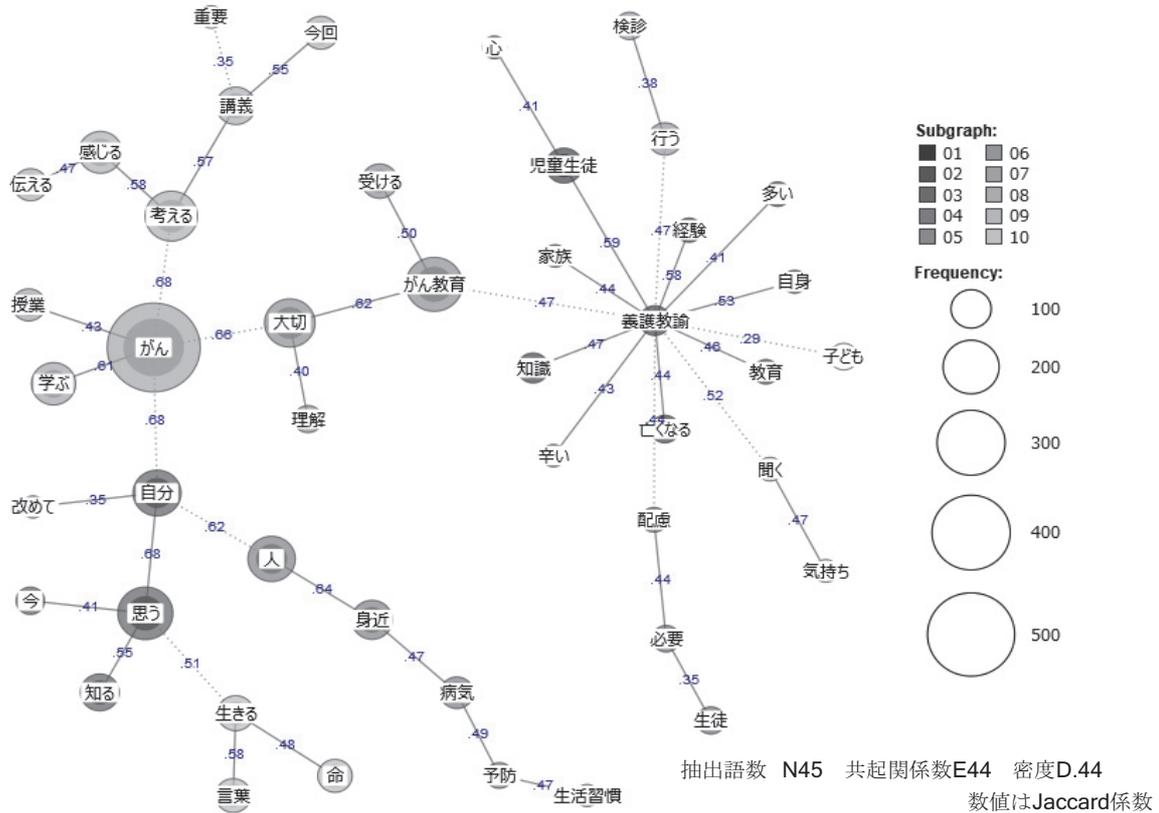


図5. 授業のふり返しにおける頻出語30語による共起ネットワーク

回), 「生徒」(127回), 「学ぶ」(122回), 「感じる」(119回) が上位10語であった(表5)。

次に、抽出された頻出語のうち最小出現回数30回以上、Jaccard係数0.2以上に設定し共起ネットワークを作成した。その結果、「養護教諭」と「子ども」の共起関係以外の抽出語において、Jaccard係数0.3以上のとても強い関連があった(図5)。なかでも、Jaccard係数0.6以上の共起関係は最頻出語の「がん」と「考える」, 「自分」(0.68), 「大切」(0.66), 「学ぶ」(0.61)であった。さらに、「がん教育」と「大切」(0.66), 「自分」と「思う」(0.68), 「人」(0.62), 「身近」と「人」(0.64)であった。これらの語を含む記述には、「私にとって初めてがんについて深く学び考える機会となった」や「がん教育が、児童生徒にとって正しい知識の習得やがんについて自分なりに考えるきっかけになればと思う」, 「児童生徒が生きていく中で、もし自分や身近な人や家族ががんになったとき、がん教育での話を少しでも思い出してくれたなら、がん教育を行った意義はある」などがあった。

8. 似通った文脈で使われていた語のグループ

ふり返りの記述において、多く出現していた語や共起関係の強い2語の組み合わせ、共起関係の強い語の形成

グループが明らかになった。そこで、似通った文脈で使われていた語のグループを探るため、共起ネットワーク同様抽出された頻出語のうち最小出現回数30回以上の語において、階層的クラスター分析を行った。その結果、クラスター1は「がん」「がん教育」「思う」「考える」などの11語からなり、がんやがん教育に対する思考に関連する語が集まっていたため、【がんやがん教育に対する認識】と命名した。クラスター2は「講義」「受ける」「心」など5語からなり、今回の講義から家族ががんになることや児童生徒の心に寄り添う上での決意に関連する語が集まっていたため、【学びからの決意】と命名した。クラスター3は「生徒」「生きる」「言葉」「命」など8語からなり、主にがん教育の実践から心動かされた思いや言葉に関連する語が集まっていたため、【心動かされた思いや言葉】と命名した。クラスター4は「検診」「重要」など3語からなり検診の重要性に関連する語、クラスター5は「病气」「必要」「予防」など6語からなりがんの予防に関連する語が集まっていたため、それぞれ【検診の重要性】、【がんの予防】と命名した。クラスター6は「子ども」「改めて」の2語からなり、子どもを思い改めてがん教育を考えたことに関連する語が集まっていたため【改めての思考】と命名した。クラスター7は、「児童生徒」「行く」「養護教諭」など

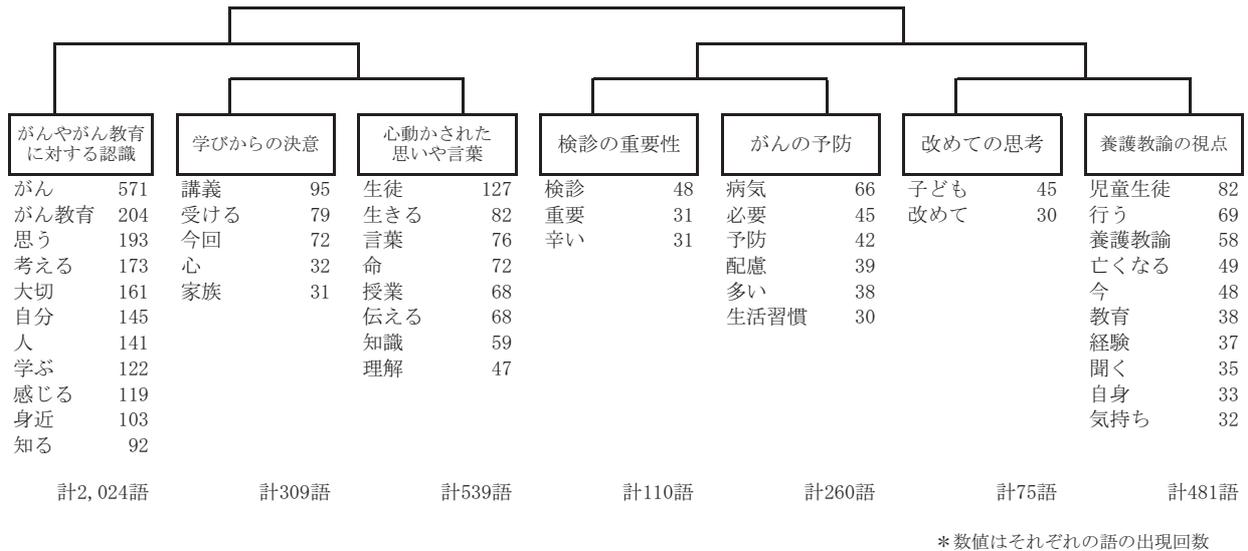


図6. 授業のふり返りにおける出現回数30回以上の階層的クラスター分析テンドログラム

10語からなり主にがん教育を行う際の養護教諭の視点に関連する語が集まっていたため、【養護教諭の視点】と命名した。

以上7つのクラスターそれぞれに、頻出語を示したテンドログラムを図6に示す。

7つのクラスターは、【学びからの決意】クラスターと【心動かされた思いや言葉】クラスターが併合され、さらに、【がんやがん教育に対する認識】クラスターに併合されていた。一方、【検診の重要性】クラスターと【がんの予防】クラスター、【改めての思考】クラスターと【養護教諭の視点】クラスターが併合されていた。これら併合された両者が結合し、さらに【学びからの決意】、【心動かされた思いや言葉】、【がんやがん教育に対する認識】クラスターが併合されていたものと結合されていた。

IV. 考 察

1. 身近な人のがんの経験とがんに関する学習経験

対象者における身近な人のがんの経験は、身近でがんを経験した人がいる者43.0%、がんで療養中の人がある者10.8%、がんで亡くなった人がいる者45.2%であった。身近でがんを経験した人がいる者について、大学生を対象にした菊池ら(2021)⁹⁾の研究によると46.6%であり、本研究でもほぼ同様の傾向があったといえる。一方、北海道の高校2年生を対象にした野口(2023)⁷⁾の研究では、身近でがんを経験した人がいる者43.8%、がんで療養中の人がある者8.2%、がんで亡くなった人がいる者38.5%であった。本研究の対象者は、身近でがんで亡くなった人がいる者が45.2%と2.2人に1人であり、

前述の高校生や我が国の3.8人に1人ががんで亡くなる状況¹⁾より高いことが明らかになった。

また、身近でがんを経験した人や療養中、がんで亡くなったいずれかの人がいる者は58.1%(54名)であった。このような状況の背景として、本研究の対象者が全国的にもがんによる死亡率の高い北海道出身者が主たることに関連が考えられた。一方、対象者の身近な人のがん経験とがんに対する印象との関連は見られなかった。したがって、がん教育の実践的指導力の育成プログラムにおける具体的な配慮は見当たらなかった。

がんに関する学習経験がある者は52.7%であり、そのうち61.2%が複数校種での学習経験であった。その学習経験は、中学・高等学校49.0%と最も多く、次いで高等学校28.6%であった。対象者の多くは、文部科学省が「がん教育総合支援事業」を始めた2014年が中学1年生にあたり、がん教育推進の機運の高まりやがん教育推進のための補助教材が充実してきた過渡期のなかで中学・高等学校時代を過ごしている。このような教育環境が、がんに関する学習経験が全くない者から複数校種での学習経験のある者までと一様ではない状況を生んでいると考えられた。

文部科学省は、がん教育について「保健体育科におけるがんの予防や回復に関する内容が中心となるが、特別活動や道徳科等も含め、学校教育全体を通じて行われる健康教育に位置付けて推進する必要がある⁶⁾とし、「目的や意義を地域・社会と共有し、がん専門医をはじめとする医療従事者やがん経験者等、学校外の人材を積極的に活用することが重要¹⁰⁾との見解を示している。また、2023年3月に閣議決定された第4期がん対策推進基本計画においても「医師やがん患者・経験者等の外部講師を活用し、こどもに、生活習慣や遺伝子等のがんの発

生に関する基本的な情報も含めたがんの正しい知識やがん患者・経験者の声を伝えることが重要¹¹⁾であることが明記されている。しかし、対象者の学習経験は、中学校以降における教師による保健の授業73.5%が最も多く、外部講師と協働した形態は26.5%、4人に1人にすぎなかった。つまり、対象者の半数はがんに関する学習経験があるものの、その形態は教科指導中心であったことが明らかになった。そして、必ずしも学校教育全体を通じて行われる健康教育に位置付け展開されるに至っていないことが推察された。野口(2023)⁷⁾は、外部講師による緩和ケアの学びから生徒は「『がんになった人の生き方、考え方に学んだ』といった人生学としての学びが推察された」と外部講師と協働したがん教育の有用性を示している。したがって、教科指導に加え健康教育に位置付けたがん教育における外部講師の活用や養護教諭の寄与については、今後の課題と考えられた。

2. がん教育の実践者としての学びとがんの印象

がん教育に関する7項目について、授業前いずれの項目も「関心がある群」が9割を超え、とても関心がある項目として「がん教育を行う上で大切なこと」61.3%が最も多く、次いで「がん教育を行う上での配慮」54.8%であった。そこで、授業では「がん教育で大切なこと」についてグループで対話する場面を組み入れることとした。授業後、がん教育に関する7項目について、いずれの項目も「学びの実感がある」群が93.0%以上であった。そのなかで、とても学びの実感があった項目として、「がん教育を受けた生徒の感想」85.1%が最も多く、次いで「がん教育を行う上で大切なこと」83.8%であった。がん教育を受けた生徒の感想から「今までの人生を振り返る者、過去を悔やむ者、考えることはみな違うが、一度の学びで大きな影響を与える」や「生徒の感想で、今生きてて普通に生活していることが幸せという言葉に感動した」といった学びの実感となり、がん教育の実際を理解するうえで有用であることが示唆された。さらに、同様の項目について「参考になった」群がいずれも94.0%以上であった。そのなかで、とても参考になった項目として、「がん教育を行う上での配慮」93.2%が最も多く、次いで「がん教育を行う上で大切なこと」90.5%であった。グループごとの「がん教育を行う上で大切なこと」についての対話から、「自分では思いつかない新しい視点から考えることができた」、「これまでに考えてこなかったことについて深く考える機会」になっていた。以上のことから、教職を志望する学生はがん教育を行う上での配慮や大切なことについての理解を重要視していることが推察された。加えて、このような学びの実感や「自分が教員になった時、どう教えるか」につ

いて参考になった点から、「がんについて生徒たちに教えていくには、まず自らががんについての教養を持つことが大切」といったがん教育の実践としての認識を深めていた。さらに、「実際の生徒が授業を受けた感想や様々な動画を視聴して、がんを自分事と捉え、自分だったらどうだろうと考えた」といった自身の生き方として、がんやがん教育を自分事と捉えていたことが推察された。それは、「がん教育にとどまらず一人ひとりの生き方や命について考える大変貴重なものだった」学びとして受け止めていた。

「がんはこわいと思うか」について、こわいと思う者が授業前88.2%、授業後74.3%であり授業後有意に減少していた。内閣府(2017)¹²⁾の「がん対策世論調査」では、がんはこわいと思う者は、全世代72.3%、18~29歳81.2%であり、若年層にがんはこわいと思う者が多い。本研究でも、授業前88.2%と5人に4人ががんはこわいと思っていた。しかし、授業後がんはこわいと思う者が74.3%と有意に減少した。このことから、がんに対する正しい理解は、漠然としたこわさの軽減につながるものが考えられた。がんがこわい理由(複数回答)として、「がんで死に至る場合があるから」が授業の前後ともに最も多く、授業前93.9%、授業後90.3%であった。がんは予防が可能な病気であると理解する反面、死に至る場合がある事実を重く認識していることが推察された。

がんの印象について、「身近な病気」、「人生を振り返る機会」、「自分を見つめる機会」、「がん=死ではない」、「がんになって初めて気づくことがある」では、肯定する割合が授業後有意に増加した。一方、「人生を変えてしまう」、「多くのものを失う」では、肯定する割合が授業後有意に減少した。このことから、がんを身近な病気として再認識し、がんは人生を振り返ったり自分を見つめたりする機会となるといった捉え方が高まり、人生を変えてしまったり多くのものを失うといったネガティブな捉え方が弱まるなど捉え方の変容が推察された。加えて、がん=死ではない、がんになって初めて気づくことがあるなどがんを多様な視点で捉えるに至ったことが示唆された。

このように、がんの捉え方の変容や多様な視点での捉えが、前述の授業後がんはこわいと思う者の減少に影響したことが考えられた。そこには、がんに対する漠然としたおそれから、正しくおそれる認識が変わったことが推察された。

3. ふり返りからみる授業実践の有用性

授業に対するふり返りの記述において、出現回数30回以上の語は45語でありいずれも強い共起関係がみられた。最頻出語の「がん」と「考える」、「自分」、「大切」、

「学ぶ」、「がん教育」と「大切」、「自分」と「思う」、「人」、「身近」と「人」では、Jaccard係数0.6以上の共起関係があった。これらの語は、階層的クラスター分析において最も多い2,024語が集積された【がんやがん教育に対する認識】クラスターに関連する語である。つまり、ふり返りの文脈で出現回数30回以上の語の53.3%の語が、がんやがん教育に対する認識について記述されていたといえる。具体的には、「がんについて理解を深めるとともに、がん教育の大切さについてより深く考えることができた」や「がん教育を進める上で大切なこと、配慮しなければならぬことを知ることができた」、「がんを正しく知ることの大切さを考えた」などであった。

前述のとおり、がんの印象について「身近な病気」、「人生を振り返る機会」、「自分を見つめる機会」、「がん＝死ではない」、「がんになって初めて気づくことがある」では、授業後に肯定する割合が有意に増加し、「人生を変えてしまう」、「多くのものを失う」では、肯定する割合が有意に減少したことが明らかになった。これらと関連した記述として、「がんに対するイメージや考え方が大きく変わった」、「自分らしく生きることを考えた」、「様々な視点からがん向き合うきっかけになった」といった記述があり、がんを多様な視点で捉え、自身の生き方と照らし合わせて考えたことが推察された。合わせて、がん教育は「いのちや家族や周囲の人とのかかわりを考えるきっかけになる」、「生きることについて考える貴重な機会」といった記述があった。ここに、対象者ががん教育は生きることを考える教育であり重要かつ大切にしたい教育といったがん教育の実践者としての認識が推察された。対象者がこのような認識に至った背景について、【学びからの決意】と【心動かされた思いや言葉】クラスターに見ることができた。「生きる」「言葉」「命」をはじめ539語が集積された【心動かされた思いや言葉】クラスターでは、『命を大切』から『生きることを大切』に」や「余命ではなく与命」、「がんになったのは誰のせいでもない」、「あなたを大切に」、「いのちは限りがある。でも生き方には限りがない」といった言葉を心に残った言葉としてあげた記述が少なくなかったことが示された。そして、「これらの言葉を胸に刻んで毎日を大切に生きていきたい」や「今自分ができることを精一杯行動にしていきたい」、「当たり前の日々感謝したい」といった【学びからの決意】に至ったことが推察された。さらに、「がんが怖いのではなく、がんを知らないことが怖い」をはじめ、「高校生の言葉から死は遠いようで近く、それぞれが病気や生死を自分事としてとらえている」といったがん教育を受けた生徒の感想から、がん教育を行う上で大切なことの気づきや思

考が見られた。そして、「生きることについて考えさせられる時間」といった自分の在り方や生き方を考えたことが示唆された。同時に、「生きることの大切さを知ってもらえるような」、「生徒の心を支えるような授業を実践したい」や「心に響くがん教育をしたい」といったがん教育の実践に対する意欲が引き出されたことも推察された。

以上の3つのクラスターに集積された抽出語は、出現回数30回以上の語の総計3,798語のうち2,872語と75.6%を占めた。授業の学びにより心動かされた思いや言葉から、対象者はがんに対しネガティブな捉え方が弱まったり、多様な視点で捉えたりするなどがんに対する理解について捉え方の変化があった。そして、がん教育は生きることを考える教育といったがんやがん教育に対する新たな認識を持ったことが推察された。

また、がんは「誰にでもなりえる病気であり、もっと身近に考える必要がある」、「生活習慣の改善で予防でき、がん検診を受け早期発見と早期治療で助かる病気」といったがんの予防について再認識したことが、【がんの予防】や【検診の重要性】クラスターから示された。

【改めての思考】や【養護教諭の視点】クラスターからは、養護教諭として「積極的にがん教育を行っていきたい」や「がん患者への理解を深めることができるようながん教育を充実させたい」、「がん教育にどう関わっていくか考えた」といった養護教諭としてのがん教育の実践に対する意欲や関わりが記されていた。

一方、「私のお母さんはどんな気持ちだったんだろう」、「私も高校生の時に学べていたら少しは気持ちが楽になっていたのかな」といった身近な人ががんであったり、亡くなったりしたエピソードを記す記述が散見された。対象者にとって、がんやがん教育の学びは、自身のがんに関わる出来事とその感情を想起させ、ふり返る機会にもなっていたといえる。また、子どもから親のがんを打ち明けられたら、「子どもにどのような言葉をかけることができるのか」といったがん教育の配慮とともに、対応の難しさを自問する記述もあり、がん教育について深く考えるほどがん教育の難しさを思ったことが推察された。

4. がん教育の実践的指導力の育成と外部講師との協働

次に、がん教育の実践的指導力の育成と外部講師との協働について検討する。本研究の授業実践では、外部講師との協働については実践の事例紹介のみに留まった。そのため、外部講師と協働したがん教育の具体的な進め方について考えさせることができなかった。

がん教育とは「健康教育の一環として、がんについての正しい理解と、がん患者や家族などがんと向き合う

人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育²⁾である。つまり、がん教育はがんに対する正しい理解に留まらず、「がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解」や「共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る」包括的な教育といえる。望ましい生活を送っていてもがんになることがあるように、人生において正しいことだけが全てではない。がんと向き合う人々の現実について医療従事者やがん経験者等の外部講師が語ることは、がんと向き合う人々に対する共感的な理解のみならず、生きることを考える学びになる。したがって、在学中に外部講師の講話を聞く機会が重要と考える。

ただ、がんに関する学習経験が一律ではなく、十分とはいえない対象者に対し、2講の時間的枠組みの中に外部講師の講話を組み込むことは、いずれの内容も学びが深まらない可能性が考えられる。したがって、保健体育科教諭や養護教諭を志望する学生に対するがん教育の在り方として、がんの理解、がん教育の理解に加え、外部講師と協働したがん教育の重要性と進め方の3観点から3講義の枠組みのなかでの授業を構成することが望ましいと考える。

V. ま と め

対象者のこれまでのがんに関する学習経験は十分とはいえないことから、授業実践は「がんを理解する」、「がん教育を理解する」2つのテーマから「がん教育を考える」2講連続する授業構成とした。その結果、本研究におけるがん教育の実践は、がんやがん教育の理解を深めがん教育の実践者としての意識の喚起に有用であったと考える。

がんやがん教育の理解については、がんを多様な視点で捉えたことが推察された。具体的には、学びを通して自分を見つめる機会になったり、命や生きることを考えたり周囲の人とのかかわりを想起し、自分の在り方や生き方を考えていた。つまり、がん教育はがんと病気の理解のみならず、がんになることを自分事として捉え考える教育といった認識に変容したと考えられた。その際、がんに対するネガティブな印象から「よめい」が残りの命ではなく与えられた命といった前向きな捉え方に感銘を受けるなど、対象者にとって新たな視点があった。

がん教育の実践者としての意識の喚起については、がん教育を受けた高校生の多様な感想から触発されたことが推察された。具体的には、がん教育の実際や授業を受

けた生徒の感想からがん教育を行う上で大切なことの気づきや思考があり、「生きることの大切さを知ってもらえる授業」、「生徒の心を支えるような授業や心に響くがん教育をしたい」といった意欲の喚起につながっていた。

したがって、教職を志望する学生に対するがん教育の実践的指導指導力の育成について、がんの理解、がん教育の理解に加え、外部講師と協働したがん教育の重要性と進め方の3観点から3講義の枠組みのなかでの授業を構成することが望ましいと考えられた。

今後も引き続き授業実践を積み重ね、がん教育の実践的指導指導力を培うプログラムについて検討していきたい。

謝 辞

本研究を取り組みにあたり、2022年度「教育方法論」担当であった元北翔大学教育文化学部教育学科教授 西出勉氏には、多大なご理解とご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げます。また、本研究の事前事後の調査及び授業のふり返りにご協力いただいた学生の皆様に心より御礼申し上げます。

VI. 引用文献

- 1) 国立研究開発法人がん研究センターがん情報サービス https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html (2023. 4. 28閲覧)
- 2) 文部科学省「がん教育」の在り方検討会：学校におけるがん教育の在り方について報告, 2015, https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/_icsFiles/afieldfile/2016/04/22/1369993_1_1.pdf (2023. 4. 28閲覧)
- 3) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 体育編, P157
- 4) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編, P211
- 5) 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 保健体育編 体育編, P202
- 6) 文部科学省：外部講師を活用したがん教育ガイドライン（平成28年4月 令和3年3月一部改正）, P4
- 7) 野口直美：高等学校におけるがん教育の学びの先にあるもの-5年間の実践における学習実感と生徒の意識-, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, (14), 117-130, 2023
- 8) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－, ナカニシヤ出

- 版, 2014
- 9) 菊池巴瑠奈・葛西敦子：A 大学学生のがんに関する知識とイメージ, 弘前大学教育学部紀要, (125), 209-217, 2021
 - 10) 文部科学省：外部講師を活用したがん教育ガイドライン 平成28年4月(令和3年3月一部改正), P1
 - 11) 厚生労働省：がん対策推進基本計画(第4期)令和5年3月, P55, <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001077564.pdf> (2023. 5. 13閲覧)
 - 12) 内閣府：がん対策に関する世論調査 平成29年1月, <https://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-gantaisaku/gairyaku.pdf> (2023. 5. 13閲覧)

A Trial of Cancer Education for Health and Physical Education Teachers and Yogo Teachers

Naomi Noguchi

Abstract

The purpose of this study is to try to cancer education classes for university students who want to become health and physical education teachers and Yogo teachers, and to examine practical cancer education skills.

As a result, I thought that cancer education for the subjects of this study would be useful from the following points. (1) Learning experience of cancer education of target university students not uniform and cannot be said to be sufficient. (2) They understood cancer from diverse perspectives and deepened the understanding of cancer and cancer education. (3) They were inspired by the diverse impressions of high school students who received cancer education, it is surmised that led to arousal of self-awareness as a practitioners of cancer education. However, In the class practice of this study, collaboration with external lecturers was insufficient. I thought that as I thought that as practical cancer education skills for university students who want to become health and physical education teachers and Yogo teachers, it is desirable to organize classes from the following three perspectives. for university students who want to become health and physical education teachers and Yogo teachers, it is desirable to organize classes from the following three perspectives. There are three perspectives: understanding cancer, understanding cancer education, and the importance and progress of cancer education in collaboration with external lecturers.

Key words : cancer, cancer education, university students, want to become teacher, class practice